

## 資料 山之口獏：「中央公論」への投稿作品

松下, 博文  
筑紫女学園短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10373>

---

出版情報：文献探究. 31/32, pp.21-32, 1993-12-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 資料 山之口獏

——「中央公論」への投稿作品——

松下博文

## I 地べたに降りて来た文語體

太平洋戦争へと突入する昭和一〇年代初期から中期にかけて、膨大な戦争参加作品が創作された。たとえば、詩人の鶴岡善久氏は、「太平洋戦争下の詩と思想」の中で「日本を愛す」という田中克己の作品を評し、「狂信的な擬似ナショナリズムにとりつかれた」一編であると判断していた。またここで使用された言語スタイルについても、肉体化され得ぬ〈観念としての詩のことば〉の羅列であるとみなしていた（註1）。

確かに〈富士〉を「神州」のシンボルと讃仰し、〈鷹〉を「神州」を飛翔する気高き鳥の代表としてイメージする表現は、当時の鎖ざされたパラダイムのいかなる埒外にも位置しないものではあろう。畢竟それは、表現の類型化という惨憺たる事態へのレトリートを意味するものであった。そうした中で山之口獏は、いかなる活動をしていたのか。

### 天から降りてきた言葉

しやべる僕のこのしやべり方が  
ぼくの詩にそっくりだといふ

そこで僕が

またしやべる

なにしろ僕も詩人なので

しやべるばかりがぼくの詩に似てゐるのではないのである

ごはんの食べ方

わらひ方

ものをかかんがへる考へ方

こひの仕方

うんこの仕方まで

どれもがまるでぼくの詩なのである

そこでぼくの

詩がおもふ

いつまた天にのぼるのかこんな地べたに降りて来た

文語體らにしてみても

詩になるまでにはどうしても

ひとりぐらゐるは詩人も要る筈だ

いよいよはげしく立ち騒いでくる文明どもの音に入り混じつて

なりにけりとか

たりとかと

日常語にまでその文語を

生活できる詩人をひとり。

獺の鋭く個性的なリズムや文体に留意しつつ仲程昌徳氏は作品を評してこのように言う(註2)。

「ユニークな詩作態度を表明したものであると、考えることができるのではなからうか。獺がいつ頃この「天から降りて来た言葉」を書いたのか、明らかではないが、詩の終りの部分に見られる「いよいよはげしく立ち騒いでくる文明どもの音に入り混じって／なりにけりとか／たりとかと／日常語にまでその文語体らを／生活できる詩人」として、獺が新しい詩の形態の展開を工夫しようと決意したのは、決してこの詩篇を書いたときに、はじめて起こってきたものではなかったはずである」。

氏の文章には作品の成立時期について多少の文意のねじれが存在するようだが、おそらく、山之口獺というきわめてユニークな個性が昭和の新しいエコールに流されることなく詩人としての不動の磁場を形成していたという事実を氏は強調したのであろう(氏のいう「新しい詩」とは、この場合、昭和初年代のエスプリ・ヌーヴォーのそれを指す)。

しかし、作品発表時期が昭和一六年七月と確定した現在(制作時期は不明)、こうした判断とは異なる解釈がここに可能になってきた。戦時下に発表された作品として新しい角度から読み直せる可能性が出てきたということだ。つまり、(観念としての詩のことば)を縦横に使用しながら表現せんとした戦時下の人々に対し、強烈な批判がこの一篇には仕組まれているのではないかということなのだ。

「幻影解「大東亜戦争」」の中で今村冬三氏は戦争詩の表現レヴェルに注目し、戦争詩に見られる「詩語及び表現の非口語化」という問題を提示して見せた(註3)。かりに私たちが氏が引用された安

西冬衛「詔を建艦に謹む」、佐藤惣之助「昭南島入城祝歌」、三好達治「九つの真珠の御名」、村野四郎「挙り立て神の裔」、佐藤春夫「撃ちてしまむ」等の、おおく「国体」に倣った漢語や万葉語を使用した作品を全篇眺むなら、等しく、観念的で形骸化されたことばの羅列をそこに認めるに違いない。

こうした、同時代の人々の言語使用の在り方に注目して創作されたのが「天から降りてきた言葉」ではなかったのだろうか。

行動のすべてが(僕)と等身大であることが作品前半で強調され、後半では、およそ借りものの(文語體)を着用しながら創作を保持している当代の(詩人)が明らかになれる。へいよいよはげしく立ち騒いでくる文明どもの音に入り混じって／なりにけりとか／たりとかと／日常語にまでその文語體らを／生活できる詩人」という表現は、戦時下に、まさに唐突に地上に急降下して来たこれらの文語體詩人への獺一流の抑制された批判であろう。鶴岡氏の言う(狂信的な擬似ナショナリズムにとりつかれた)時局便乗型文語體詩人への抑制された嫌悪表現であろう。

先にこの部分に関する仲程氏の評を引用した。そこでは氏は、昭和初年代に展開された新詩運動のコンテクストの流れの中で当該箇所を眺もうとしていた。しかし、無論、発表時期が明らかにされた現在、こうしたテクストの延長線上でこの文章を捉えることはおそらく不可能になったと言わねばならない。

すなわち私には、泥沼化して行く戦局の中で多数の作家がおおくの時局便乗型の文語詩を書いていることへの鋭い批判を含む作品としてこの一篇は眺まれるべきではないかと思われるのだ。

「天から降りてきた言葉」とはいったい何か。もちろん、「神州」

を語る非口語体の謂である。「ココニ天照ラス大御神高木ノ神ノ命モチテ」と始まる天孫降臨のミソロジーを当代にそのまま転位させて作為された表現スタイル、こうした神話的言説が獺の言う「天から降りてきた言葉」の内実であるように私には思われるのだ。

なぜなら、〈へなりにけり〉〈へたり〉という文語表現はへいよいよはげしく立ち騒いでくる。非常時の中でこそ最も多用され最大の威力を発揮し得た言葉であった筈だからだ。同時期に連なる「鼻のある結論」「加藤清正」「紙の上」等の作品を一統されたい。その確証を、私たちは、さらに揺るぎないものにできる筈である。

## II 海に坐つて僕は食ふ

### 轉居

詩を書くことよりも まづ めしを食へといふ

それは世間の出来事である  
食つてしまつた性には合はないんだ

もらつて食つてもひつたぐつて食つても食つてしまつたわけなんだ  
死ねと言つても死ぬどころか死ぬことなんか無駄にして食つてしま

つたあんばいなんだ

ここに食つたばかりの現実がある

空っぽになつて露はになつた現実の底深く 米粒のやうに光つてゐる  
た筈の 両國の佐藤さんをもついに食つてしまつた現在なんだ

陸はごらんの通りの陸である

食はうとしてもこれ以上は 食ふ物がなくなつたんだといふやうに

電信柱や塵箱なんか立つてゐて まるでがらんとしてゐる陸なんだ

言はなくなつて勿論である。

めしに飢ゑたらめしを食へ めしも盡きたら飢ゑも食へ 飢ゑにも  
飽きたら勿論なんだ

僕を見よ

引つ越すのが僕である

白ぼつてくても人間面をして 世間を食ひ廻はるこの肉體を引き摺

りながら 石や歴史や時間や空間などのやうに なるべく長命し

たいといふのが僕なんだ

お天氣を見よ

それは天氣のことなんだ

海を見よ

陸の隣りが海なんだ

海に坐つて僕は食ふ

甲板の上のその 生きた船頭さんをつまんで食ひながら 海の世間

に向つては時々大きな口を開けて見せるんだ

魚らよ

びつくりしなさんな

珍客はこんなに肥つてゐても

陸の時代では有名な いはゆる食へなくなつた詩なんだよ。

大正末期に故郷沖繩を出郷し一路上京した山之口獺は、以後、昭和  
一二年の結婚に至るまで一定の住所を持つことはなかった。銀座  
二丁目にあつた書籍問屋東海堂書店発送部の荷作りを手始めに、暖

房屋↓鍼灸↓ダルマ船↓汲み取り屋↓ニキビ・ソバカス薬の通信販売等の職を転々とし、それにともなって両国ビルディング↓日本橋人形町にあったビルディング等、浮浪者として陸の隙間を縫っては歩いていった。が、結局、陸の生活にも追い詰められてしまうことになる。おのずと生活空間は水上へと移動して行くのだった。

〔隅田川のダルマ船にのり込むようになった。コーヒー店「エスキヤール」で知り合った船頭さんから、おじさん船にのってみないかと誘われてその気になったのである。堅川（隅田川の支流）方面の鉄屋、鈴木徳五郎商店の鉄屑を、鶴見の日本鋼管に運ぶ水神丸というダルマ船に乗り込んだ。日本鋼管の岩壁で荷揚げするまでである期間、滞船することがあったが、日頃、半てんに鉢巻姿の若い船頭さんは、夕方になると蝶ネクタイなどをつけ、えらい紳士になりすまして、横浜にぼくを誘うのである。コーヒー店などに入り、かれは音楽をたのしんだのである。当時、川崎にいた佐藤惣之助に、その話をすると、どうしてそんなダルマ船に乗っているのかと聞かれたが、陸上を食いつめた揚句なのであった。あとになって、「中央公論」に発表した「転居」という詩は、そのころのことを歌ったものである。——「ぼくの半生記」——〕

私たちは、一般に、労働の代償として賃金を貰いそれにより日々の糊口をしのいでいる。しかし、山之口獏はそうした経済上のシステムとはまったく無関係な場所に居住していた。知られる如く、「ものもらひの話」↓「喰人種」↓「食ひそこなつた僕」↓「轉居」↓「権樓は寝てる」等の作品は、そうした生活の中から生成された作品群だが、恐れずに言うなら、獏は、かれのまわりにいたすべての人間の手足を血まみれに齧りながら、それらを食いちぎって生

きていたと言ってもよい。私たち人間ほど「食う」ことに關して貪欲な動物はいないのではないか。極端な場合、親までも食ってしまう。〔齧った／父を齧った／人々を齧った／友人達を齧った〕に始まる「喰人種」はまさにそうした喰のひとつだが獏の生涯を一言で言うなら、こうした「喰人」的な一生であったと形容すること  
もまた可能ではあるう。

しかしながら獏は、そうした生活に訣別しようとは思わなかった。字義通りまさしく人を喰ったように、自由に、自身の生活を自然に生きようとした。人はこうしたノンシャランな人々を見るととき、詩なんか書くより、まっとうに働いたらどうか（註4）と忠告するに相違ない。が、それは、ごく普通に生活せんとする世間一般の人々の認識であろう。そういう認識を超越してしまった人間にとって、〔めし〕を食うことに心意を勞するより、「食う」という生きる為に為す行為をすでに不問の行為として見切ってしまった「詩人」でいた方が確かに幸福なのかも知れぬ。ただ、生身の人間である以上、現実（めし）を食わねば生きてはおれぬのだが……。つまり、食い詰めた現実がここに露呈してくる。〔空つぽになつて露はにやつた〕（がらんとしてゐる）現実が詩人の眼前に現出してくるのだ。

おそらく獏の生涯は、こうした憧憬との格闘の連続であった。

私には、「轉居」には山之口獏の行き場のない絶望感と、海上を茫然と見つめる淋しいまなざしとが投影されているような気がしてならない。次の一篇はそれを何よりも証明しているのではないか。〔街には沢山の恩人が増えました。／恩人ばかりを振ら提げて／交通妨害になりました。狭い街には住めなくなりました。／ある日／港の空の／出帆旗をながめ／ためいきついてものもらひが言ひま

した／俺は／怠惰者と言ひました。——「ものもらひの話」——。  
再上京してくる際に創作したと言われる作品だが、貌の生涯を見ていると生きる場所を移動するところからすべての生活が始まっているようにも思われる。

### Ⅲ 詩は結婚生活をくはへて来た

思ひ出

枯芝みたいなそのあごひげよ  
まがりくねつたその生き方よ

おもへば僕によく似た詩だ

るんべんしては

本屋の荷造り人

るんべんしては

燠房屋

るんべんしては

お灸屋

るんべんしては

おわい屋と

この世の鼻を小馬鹿にしたりこの世のこころを泥んこにしたりして  
詩は、

その日その日を生きたがらへて来た

おもへば僕によく似た詩だ

やがてどこから見つけて来たものか

詩は結婚生活をくはへて来た  
あ、

おもへばなにからなにもまでも僕によく似た詩があるもんだ

ひとくちごとに光つては消えるせつないごはんの粒々のやうに

詩の唇に光つては消える

茨城生れの女房よ

沖繩生れの良人よ

昭和一二年一二月、山之口貌は茨城生まれの安田静江と結婚した。

それはながらく書き継いできた「求婚の広告」「若しも女を掴んだら」「現金」「唇のやうな良心」「萌芽」「青空に囲まれた地球の頂点に立つて」等の求婚詩篇群の終焉と、結婚により創作されはじめた「畳」「結婚」「友引の日」「弾痕」の如き結婚生活詩篇群の誕生を意味している。

結婚により貌にもたらされた現実とはいったい何か。表面上はへ桐の箆筒へ（薬罐）へ火鉢へ（鏡台）へ鍋へ（食器）等さまざま生活用品であった。

### 畳

なんにもなかつた畳のうへに

いろいろな物があらはれた

まるでこの世のいろんな姿の文字どもが

声をかぎりに詩を呼び廻はつて白紙のうへにあらはれて来たやうに  
血の出るやうな声を張りあげては

結婚生活を呼び呼びして

をつとになつた僕があらはれた

女房になつた女があらはれた

桐の箆筒があらはれた

菜罐と

火鉢と

鏡台があらはれた

お鍋や食器が

あらはれた

〈女房〉 〈桐の箆筒〉 〈菜罐〉 〈火鉢〉 〈鏡台〉 〈鍋〉 〈食器〉

等結婚によつてさまざまな名詞が僕の眼の前には並べられるが、しかし並んでいないものがひとつあった。「お金」である。僕の生涯はまた借金との格闘であつたと形容することも可能である。そうした経緯は「貧乏を売る」「友情と借金」「マイナス五千円―最後の質種は女房が工面する」「質札」等のエッセイに眼を通すなら一層明らかになるが、「結婚」と題する次の一篇はこうした事情を如実に示し得た一篇であろう。

### 結婚

詩は僕を見ると

結婚々と鳴きつゞけた

おもふにその頃の僕ときたら

はなはだしく結婚したくなつてゐた

言はゞ

雨に濡れた場合

風に吹かれた場合

死にたくなつた場合など、この世にいろいろの場合があつたにしても

そこに自分がゐる場合には

結婚のことを忘れることが出来なかつた

詩はいつもはつらつと

僕のゐる所至る所につきまといつて来て

結婚々と鳴いてゐた

僕はとうとう結婚してしまつたが

詩はとんと鳴かなくなつた

いまでは詩とはちがつた物がゐて

時々僕の胸をかきむしつては

箆筒の陰にしやがんだりして

おかねが

おかねがと泣き出すんだ。

第二詩集「山之口獏詩集」の特徴を仲程昌徳氏（註5）は以下のように整理する。(1)結婚したことについての詩篇が新しく付け加わつたこと、(2)「沖繩」「琉球」という明確な表現（出自を隠そうとする意識からの解放）が現れてきたこと。

引用した「思ひ出」「暈」「結婚」にこうした特徴を見ることは確かに容易なことではあろう。そしてさらに氏は、「思ひ出」を、(3)「過去の放浪生活と、その生活を根底にしてうたわれた諸詩篇と

の訣別を意味するもの」と評し、(4)へ「思ひ出」の最終行、「沖繩生れの良人よ」には、重大な決意に似たものがこめられていたのではなからうか。それは、何かというのと、今まで隠れつづけていた出自を明確にしたということに関してである」とも言う。

(3)に対しては特別に異論はない。が、しかしながら、「出自を隠そうとする意識からの解放」等という(2)の要素がそこに付帯されるなら話は別である。少なくとも私は、(2)の線上でこの一篇を裁断しようとは思わぬからだ。獺にとつて出自と出身地とは、むしろこの際どうでもよかったのではなかったのか。私たちは、差別意識や劣等意識と等価に連繫されたあの「会話」の呪縛から少なくともここでは真に解放されなくてはならないのではなからうか。

「思ひ出」を虚心に読めば、(へうすぎたない郷愁) (「動物園」) ↓(へうすぐもる旅愁) (「喰人種」) ↓(曇天のやうな郷愁) (「賑やかな生活である」) の如き従来「負」のイメージで形容されてきた不透明な「故郷」が、結婚という人生の節目を境にして鮮烈な「正」のイメージとしてここに初めて獲得されたということではないか。

決してそれは、沖繩が過去に受けて来た差別待遇・劣等意識からの復権を企図したものではない筈だ。むしろすべては、獺自身の私的な問題であり、結婚という「血」と「血」の結合によって生じる新しい「血」の誕生、それにより混入・醸成・獲得された新しい故郷意識、さらに、ようやく結婚まで辿り着けたことの喜び、を誇らかに告げんとする内的意識がしっかりと刻印されていた筈である。

へうしろを振りむくと／親である／親のうしろがその親である／その親のそのまたうしろがまたその親であるというやうに／親の親

の親ばっかりが／むかしの奥へとつゞいてゐる／まへを見ると／まへは子である／子のまへはその子である／その子のそのまたまへはそのまた子であるといふやうに／子の子の子の子の子ばっかりが／空の彼方へ消えるやうに／未来の涯へとつゞいてゐる／こんな景色のなかに／神のバトンが落ちてゐる／血に染まつた地球が落ちてゐる——「喪のある景色」——の如き連綿と続く人類の過去・現在・未来をテーマにした「血」の継承伝達にあずかる作品が同時期に制作されている事実は、もとよりその一端を証しているのではなからうか。

再度強調しておこう。(へうすぐもる旅愁) (沖繩生れの良人よ) という最終行に私は積極的な民族解放の声を聞こうとは思わぬ。この一行はむしろ、こうしたイデオロギーとは全く無縁のそれであると見做すべきものである。すなわち、継承し伝承されて行く「血」の問題を、それによって混入・醸成された確かな存在としての故郷意識を、そしてようやく結婚に漕ぎ着けたことの喜びを、素直に公表せんとした一行であるように私には思われるからである。

#### IV 「中央公論」への投稿作品

昭和一二年六月、「中央公論」七月号に山之口獺の「轉居」(昭和一三年八月刊行の第一詩集「思井の苑」に収録)が掲載された。以後、「思ひ出」(昭和一五年一二月刊行の第二詩集「山之口獺詩集」に収録)「天から降りてきた言葉」(昭和三九年一二月刊行の遺稿集「鮪に鯛」に収録、ただし、収録の際の詩題は「天から降りて来た言葉」)等の作品も掲載されることになる。



昭和12年7月号「轉居」(詩)

昭和12年12月号「ダルマ船日記」(小説)

昭和13年9月号「詩人便所を洗う」(小説)

昭和14年1月号「天国ビルの斎藤さん」(小説)

昭和15年1月号「思ひ出」(詩)

昭和15年5月号「詩人国民登録所にはあらはる」(小説)

昭和16年9月号「天から降りてきた言葉」(詩)

昭和18年6月号「詩人の結婚」(小説)

昭和26年12月号「第四「貧乏物語」」(小説)

「中央公論」に自作品を発表していた事実については「新潮」昭和二五年六月号掲載の「お福さんの杞憂」を始め「ぼくの半生記」(「沖繩タイムス」昭和三三年一月二五日〜二月一日)、「両国の思い出の人たち」(「沖繩タイムス」昭和三五年三月一日)、「私の青年時代」(「社会人」昭和三八年四月号)等で、自身、明らかにしていた。

(もう、二十年余りも前なのだが、ぼくは本所両国に住んでいたことがある。むかしの国技館のあった界限で、隅田川のほとりである。両国駅のすぐ際に、両国ビルディングというのがある、そのビルの中に住んでいた。住んでいたとはいっても、そのビルの倉庫とか、空室から空室へと転々としてその日その日を過ごしていたのである。この両国ビルでのことは戦前の「中央公論」に書いた「ダルマ船日記」とか「天国ビルの斎藤さん」とか「詩人便所を洗う」とか、そういうぼくの随筆のなかにたびたび書いたことがある。

——「両国の思い出の人たち」——  
列記された「ダルマ船日記」「天国ビルの斎藤さん」「詩人便所

を洗う」に關しても、仲程昌徳氏(註6)により実生活と作品との相關關係(主に放浪時代のこと)がすでに解説されている。

しかしながら管見に入る限り、従来の報告(初出年月日の明記)は同誌面に掲載されたエッセイや小説についてのみであり、詩人研究に最も不可欠と思われる詩作品についてはまったく報告されていないようである(註7)。全集刊行の際に発表誌面全面をめぐって見るという初期的作業がおそらく省略されていた為であろう。紹介しようとした所以である(雑誌掲載本文と詩集収録本文の間には僅かな異同が存する。資料参照)。本稿では詩作以外の小説については触れなかった。全ては「註6」の仲程氏の文章を参考された。

#### 註

- (1) 鶴岡善久「太平洋戦争下の詩と思想」(昭和四六年四月・昭森社・七〜八頁参照)
- (2) 仲程昌徳「山之口隳 詩とその軌跡」(昭和五八年五月第三刷・法政大学出版社・二三八頁参照)
- (3) 今村冬三「幻影解「大東亞戦争」」(平成一年一月第二刷・葦書房・八九頁参照)
- (4) たとえば「詩人便所を洗う」(昭和一三年九月号「中央公論」)には次のような箇所が見られる。

へ或るビルディングの二階の空室に、食えない詩人となって僕は起居していたのである。そのビルディングの管理をしている佐藤さんという人と僕とが十年來の知己なので、お蔭で僕は空室に住むことが出来たのである。もっとも、空室に借り手がつくと、その度に、僕は、二階から三階の空室へ、三階から四階の空室へ、四階からは地下室のポイラー場へと、空室から空室を、寄生虫みたいに転々として生活を営んでいたのである。

こういう僕の生活振りや、ダルマ船に乗ってみたり、暖房屋であったり、路傍に寝ころんだりしたことのを佐藤さんの言い分に依れば、それは僕が詩人だからとのこと、あっさりとして詩人のせいにしていたのである。だから常々、僕の顔さえ見れば、一度はきつと詩人なんかやめなさいよと佐藤さんは言うのだった。就中、衣食住の、食の件まで彼の恩恵を蒙る段になると、もう今日限り詩人をやめなさいとくるのだった。しまいは、空室をのぞきに来ては、どうです詩人をやめる気はないんですかと言って、次第に加速度的な態度を示すようになって来たのである。流石に僕も根負けして、或る日、彼に蒙った恩恵を見ぬ振りしながら、こころもち怒気をほめかして見せるように、詩人をやめると僕は死にますよと言ってしまった。すると、佐藤さんは呆れたもんだと思っただのか、めしが食えないで何が詩人です詩人をやめてめしを食った方がいいんですよ、とはねかえした。そんな時には僕もまた僕で、詩人をやめると食いたくもなくなるんですよ、と言うのが常だった。これは嘘みたいいきこえるかもしれないが、なんでこれが嘘だろう。佐藤さんに限らず、世間のあるところ至る所でかような目にあつて、

恥を浴びるにはすっかり馴れてしまったこの僕が、嘘でこんなに詩人顔して生きているもんか、とにかく僕には、詩人をやめてまで食わねばならない理由がないのであった。)

(5) 仲程昌徳「山之口獺 詩とその軌跡」(昭和五八年五月第三刷、法政大学出版社・一五七―一八一頁参照)

(6) 「長い随筆」の中の獺——自伝小説と詩との関係について——(「青い海」昭和五〇年五月・青い海出版社)、「山之口獺の小説」(「山之口獺全集第二巻小説」昭和五〇年一月・思潮社)、「山之口獺の詩」(「四次元・詩と詩論」昭和五一年五月・矢立出版) ↓ 「近代沖繩文学の展開」(昭和五六年一月・三一書房) 参照

(7) ただし、「轉居」は獺自身により掲載雑誌が明らかにされている。随筆「私の青年時代」には次のような記述が見える。

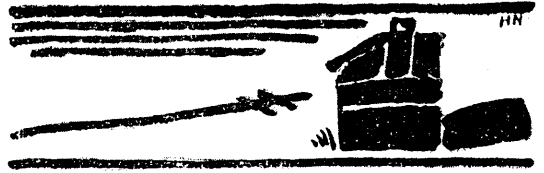
「ダルマ船のときには、陸を食いつめて水上に移り、まるで船頭さん食っているみたいな自分の姿を見たりして「轉居」という詩を書いたり、汲取屋になっては、くさいと言うにはすでに遅かったという詩「鼻らある結論」を書いたりして、「改造」とか「中央公論」などに発表したものであった」(「私の青年時代」)。また、「ぼくの半生記」にも同じ内容の文章が見えるが、本稿「Ⅱ 海に坐つて僕は食ふ」ですでに引用した。参照されたい。

(一九九三年三月稿)

——筑紫女学園短期大学助教——

# 轉居

山之口 貌



時を暮くことよりも まづ めしを食へといふ  
それは世間の出来事である  
食つてしまつた性には合はないんだ  
もらつて食つてもひつたくつて食つても食つてしまつたわけなんだ  
死ぬと言つても死ぬどころか死ぬことなんか無駄にして食つてしまつたあんなばいなんだ  
ここに食つたばかりの現實がある  
空っぽになつて歸はになつた現實の底深く 米粒のやうに光つてゐた筈の 兩國の佐藤  
さんをもつひに食つてしまつた現存なんだ  
腹はごらんの通りの腹である  
食はうとしてもこれ以上は 食ふ物がなくなつたんだといふやうに電信柱や電線なんかに  
立つてゐて まるでがらんとしてゐる腹なんだ



胃はなくなつて勿論である  
めしに飢えたらめしを食へ めしも嫌きたら飢えも食へ 飢えにも飽きたら勿論なんだ  
僕を見よ  
引つ越すのが僕である  
白ぼつてくても人間面をして 世間を食ひ廻はるこの肉體を引き摺りながら 石や歴史  
や時間や空間などのやうに なるべく長命ながいしたいといふのが僕なんだ  
お天氣を見よ  
それは天氣のことなんだ  
海を見よ  
腹の隅りが済なんだ  
海に坐つて僕は食ふ  
甲板の上のその 生きた船頭さんをつまんで食ひながら 海の世間に向つては時々大き  
な口を開けて見せるんだ  
魚らよ  
びつくりしなさんな  
珍客はこんなに肥つてゐても  
隣の時代では有名な いはゆる食へなくなつた時なんだよ。

思ひ出

山之口 貌

枯芝みたいなそのあごひげよ

まがりくねつたその生き方よ

おもへば僕によく似た詩だ

るんべんしては

木犀の薔造り人

るんべんしては

燧房扉

るんべんしては

お灸用

るんべんしては

おわい屋と

この世の鼻を小馬鹿にしたりこの世のころを

泥んこにしたりして

詩は、

その日その日を生きたがらへて来た

おもへば僕によく似た詩だ

やがてどこから見つけて来たものか

詩は結婚生活をくはへて来た

あ、

おもへばなにかならなまでも僕によく似た詩が

あるもんだ

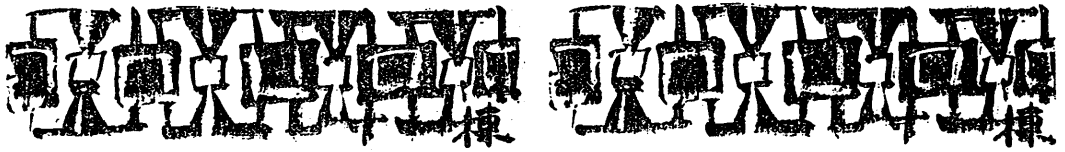
ひとくちごとに光つては消えるせつないごはん

の粒々のやうに

詩の唇に光つては消える

茨城生れの女房よ

沖繩生れの良人よ



# 天から 降りてきた言葉

山之口  
猯

しゃべる僕がこのしゃべり方が  
ぼくの詩にそっくりだといふ

そこで僕が

またしゃべる

なにしろ僕も詩人なので

しゃべるばかりがぼくの詩に似てゐるのではないのである

ごはんの食べ方

わらひ方

ものをかかんがへる考へ方

こひの仕方

うんこの仕方まで

どれもがまるでぼくの詩なのである

そこでぼくの

詩がおもふ

いつまた天にのぼるのかこんな地べたに降りて来た

文語體らにしてみても

詩になるまでにはどうしても

ひとりぐらゐは詩人も要る筈だ

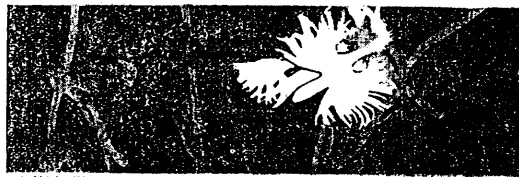
いよいよはげしく立ち騒いでくる文明どもの音に入り混つて

なりにけりとか

たりとかと

日常語にまでその文語を

生活できる詩人をひとり。



(一頁六小・種)

